英米文化の背景「英米人の迷信・俗信」考（15）
Ⅳ　年中行事―その4　万愚節・聖ジョージ祭とシェイクスピア生誕祭・五月祭

藤高　邦宏
倉敷芸術科学大学生命科学部

（2006年10月4日　受理）

はじめに

太古の昔より、いずれの文化においても人々は諸祭を催し、諸行事を行ってきた。これから後もそれは同じことであろう。常によりよき今日とより幸福な未来を願って生きる人々にとっては、先ずは自然の恵みに対して神に感謝し、また一方、単調になりがちな日々の生活の中で、自らの心と体に活を入れることが必要かつ肝要なことであろう。

今号では、春の訪れとともに始まる万愚節 April Fools' Day、聖ジョージ祭 St. George's Day その他、さらに夏の到来を喜び祝う五月祭 May Day までを扱い、それぞれの習慣とそれにまつわる多様な俗信の考察を試みたい。

1　万愚節 April Fools' Day ; All Fools' Day（4月1日）

この陽気な慣習行事の起源は依然として謎のままである。その諸説の中に、人を担いで笑うことに関連するせいか、ケルト人の笑いの神の祭りに由来する行事であるとか、また古代ローマのものの価値や順序などを逆転して騒いだ無礼講の祭りであり、その農神祭 Saturnalia がその原型であるとか多様に言われるが、いずれも確たる説明とは言い難いようである。

諸説の中に、William Walsh による暦法に関連するところからの説明がある。それは、E. Cobham Brewer や今日の Charles Kightly その他によってよりよき説明と評される下記のものである。

この風習が定着するのは、16世紀後半のフランスにおいてであった。当時フランスでは、国王シャルル四世 Charles Ⅳの定めによるグレゴリオ暦の採用によって、元日 New Year's Day が3月25日から1月1日に移された。一方、旧暦のユリウス暦においては3月25日は聖週間 holy week（復活祭前の1週間）であったため、新年の祝祭は4月1日に延期して行うしきたりが何世紀にもわたって続いた。（また新年の祝いは3月25日から4月1日までの8日間で、最後の日がピークで賑やかに祝われた、とも言われる。）それが新暦の導入によって元日が1月1日に変更されても、多くのフランス人たちは4月1日に

隣人を訪問し、その日がまだ元日であると相手に思い込ませる、といういたずらを仕掛けた。その後それが世界に広がっていき、その日には隣人や友人のユーモアのセンスを試す特別な日に祭り上げられたようである。[1] また、この風習がイギリスに伝わったのは、17世紀後半か18世紀初めであろうと言われている。OEDに記されたAll Fools' Dayの最古の用例は1712年のものである。[2] 担がれてからかわれる者は、スコットランドではgowk（cuckoo）カッコウと呼ばれた。[3] 最も一般的な担ぎとしては、下男や見習者に無駄な用足しをさせるというものがある。例えば、若者に手紙を届けさせる。受け取った者はまたその手紙を別の者に宛てて届けさせ、次々と同様に歩かせ、若者が「担がれた」と気づくまで使いをさせるものである。また、若者に「はとの乳を買って来て」と使いに出して、店で笑われるという例などもポピュラーなものである。[4] こうしたことが広く一般大衆、特に子供たちにとっては、この日の午前中だけは、うそをついたり、いたずらをしても許されるということで大いに楽しまれる。このごろではマスコミが人々に大掛かりないたずらを仕組むなどのユーモアもみられる。ところでこの日に関する俗信には次のようなものがある。

☆「万愚節の午前中は人を担ぐのが許されるが、午後にそれをすれば悪運が訪れる。」この日の午後に人を担ごうとすることに関して、Charles Kightlyは次のような言い回しを紹介している。

Twelve o' clock is past and gone, You' re the fool for making me one.[5]	（もう12時が過ぎたのに、 まだ私を担ごうとするなんて、あんたはほんとの大ばか者。）

☆「自分に仕掛けられたいたずらに対して、寛大さや遊び心などの万愚節にふさわしい精神で応じることができない人は、不運に見舞われる。」

☆「きれいな娘さんに担がれたときは、その埋め合わせにその娘と結婚できたり、または少なくとも友達になれる」とも言われる。

☆「万愚節の日に結婚する男性は、一生涯連れ合いに頭が上がらず尻に敷かれる。」

☆「万愚節の日に生まれた子供はたいていは幸運に恵まれるが、賭け事はことごとくつきがなく、酷い結果となる」と言われる。[6]

2 聖ジョージ祭 St. George's Day とシェイクスピア生誕祭（4月23日）

イングランドの守護聖人である聖ジョージSt. Georgeは、伝説上ではキリスト教伝導の戦士であり、古代ローマ軍の隊長であったが、3世紀後半ないし4世紀初めにパレスチナのルッダLyddaで殉教したとされる。彼の竜退治の話が広く知られるようになるのは、中世後期になってからである。

聖ジョージの一般に知られる伝説では、彼は貴族の生まれであるが、生後すぐに母を亡くした上に、魔女にさらわれ育てられたとされる。長じて大陸に渡り、サラセン人の反乱を平定し、またリビア Libya のシレネ Silene の町へ行き、そこで毎日一人ずつ処女を食う悪竜を退治し、その危機に陥っていた国王の姫セブラ Sabra を救ったとされる英雄である。この話は象徴的な意味合いを持つ(竜は「悪魔」、姫は「教会」、騎士は「騎士道」の象徴)とされ、彼がキリスト教の布教に生涯を捧げたことが語り継がれている。なお、聖ジョージに関する諸伝説は、その生涯がやや異なる風にも語られるようである。例えば、下記は Margaret Joy による記述である。

George is said to have been a Christian who became a soldier in the Roman army. The Emperor Diocletian hated Christians, and they went in fear of their lives. Secretly they nicknamed him "Bythios Drakon", which means "Dragon of the Deep", because of his cruelty. When George spoke out against the Emperor's wicked treatment of Christians, Diocletian had him put to death on 23rd April, A. D. 303.[7)]

(ジョージはキリスト教徒で、ローマ軍の兵士になったと言われる。皇帝ディオクレティアンはキリスト教徒を嫌ったので、彼らは生命の不安に陥った。彼らは密かに皇帝に Bythius Drakon とあだ名をつけたが、それは皇帝の残忍さゆえの「深みの竜」の意味である。ジョージが皇帝のキリスト教徒への酷い扱いを公然と非難すると、皇帝ディオクレティアンは彼を紀元 303 年 4 月 23 日に処刑した。)

このことから考えると、竜はキリスト教弾圧者を象徴し、ジョージはそれに対して果敢に立ち向かい、キリスト教発展のために命を捧げた聖者ととれるであろう。

聖ジョージはアングロ・サクソン時代には既に崇敬されてはいたが、13 世紀までは東アングリアの殉教王エドマンド St. Edmund や国民的聖者の証征王エドワード St. Edward the Confessor に勝ることはなかった。聖ジョージの崇敬の念が高まり始めたのは十字軍遠征以後であり、1348 年にエドワード 3 世の創立したガーター騎士団 Order of the Garter の守護聖人として崇められてからのことである。

フランスとの百年戦争では、イングランド軍の兵士たちは白地に赤の聖ジョージの十字章の軍旗を掲げて戦った。1415 年のアジャンクールの戦い Battle of Againcourt ではその加護により大勝利を収めたが、それを記念して以後は聖ジョージの祝日を最高位の国民的祝日にすることが定められた。中世後期には、4 月 23 日の祝日にはイングランド各地の都市で祝賀行事が催された。特に、London、Norwich、Chester、Leicester、York などの都市での行事は注目に値した。市長と市会議員たちの行列や、竜退治の野外劇、聖人の勇ましい騎馬像の飾りつけ、定期市 Fair や競馬も開催された。

ところが、宗教改革 Reformation 以後は、こうした祝賀行事に対する考え方が変わり、

合理的な考え方のもとでは、聖人の実在をも疑う風潮が出てきたりさえする。

1914年をピークに大英帝国Empireに対する愛国心が高まり、聖ジョージ祭は、また人々からもてはやされた。この日には小学校は半休日とされ、教会でも特別な礼拝式がなされ、人々は胸に赤いバラ（バラは英国の国花）をさして祝意を表した。

しかしながら今日では、この日に聖ジョージ祭の特別な行事がなされることはほとんどなくなっており、わずかに残っていると言えば、英国の誇る劇作家シェイクスピアがこの日に誕生したとされることから、ストラトフォード・アポン・エイボン Stratford upon Avon でシェイクスピア生誕記念祭が催されることである。ただ、付加しておくべきことは、今日では、この日にはイングランドのすべての教会に、白地に赤の聖ジョージ十字章旗が高々と揚げられることである。[8)]

3 五月祭 May Day とメーデー Labor Day（5月1日）

(1) 五月祭

5月1日に行われる祭りであるが、古くはローマのフローラーリア祭と呼ばれたもので、Polydole Virgil の言うところでは、当時の若者たちはこの日には野辺に出て Calends（古代ローマ暦の「朔日＜ついたち＞」の意）を歌ったり踊ったりして過ごし、果実と花の女神フローラ Flora を祝った。[9)] そしてその後は、ケルト族の火の祭りであるベルテーン祭 Beltane として祝われたと考えられる。ケルト民族のうち、特にドルイド教団は太陽崇拝を信条としていたので、太陽に最も近い表現手段として「かがり火」を焚き、集まった信者たちに神聖なものと見なされた朝露を振りかける儀式をしたとされる。

現在、イギリスでは5月1日を休日としていないが、スコットランドのみは5月の第1月曜日を法定休日とし、学校・官公庁・会社・銀行・商店等も休業で、日曜日と連休にして楽しまれている。

昔はこの日には多くの人々が朝早くから酒を飲み、角笛を吹き鳴らしながら、近くの森まで行進することで知られていた。森に出かけていく理由は、夏が来ると森が緑に包まれるが、緑は夏の象徴であり、またそれは豊かさと実りの豊饒の象徴でもあるからであろう。一部の地域でこの日の朝、森に出かける若者たちが歌ったとされる歌の歌詞の一部に ...going to the 'green wood to bring home the summer and the May-o'（...緑の森に行き、夏と五月を連れてこよう）の文句が見られたようである。[10)] この街路での大宴会は今もヨーロッパのいくつかの村や町で行われている。またこの五月祭は、かつてはロンドンの煙突掃除夫の陽気な祭りであったことも、[11)] 鳴り物や歓声、喚声などの賑やかな音を立てて行進するというこの祭りの伝統に繋がりがあろうと思われる。

またこの日には、古代の豊穣祭に起源をもつメイポール（五月柱）を建てた。メイポールはまっすぐに伸びる性質のあるカンバ birch かトネリコ ash などの木がよく使われ、伐採されたあと多数の牛を使って運び出したようである。それを花と青葉で飾り、紐を巻き

つけ、先端にはネッカチーフや旗などをつけて地面に垂直に立てる。そしてその周りでモリスダンス morris dancing（スペイン渡来の Moor <ムーア人>踊り）、また競技会や「五月の遊戯」'May games' と言われる素朴なゲームが演じられた。このメイポールの周りで人々が踊り興じた際の 17 世紀当時の歌を、Margaret Joy が次のように紹介している。

'Come, Lasses and lads, get leave of your dads,
And away to the maypole hie,
For every fair has a sweetheart there,
And the fiddler' s standing by …'[12]
（さあ、娘たちよ、若者たちよ、お父さんにお暇をもらい、
そしてメイポールへと急ぎなさいよ。
と言うのも、どのフェアでもそこには恋人がいるし、
バイオリン弾きも待ちかまえてるんだからね…。

この「五月の遊戯」の主人役は一般に、五月女王 May Queen か五月王妃 May Lady が務めたが、また五月王 May King、つまりイングランドやスコットランド低地地方ではよく「ロビン・フッド」'Robin Hood' の名前で呼ばれていた男がその役を務めることもあった。（なお、この人物は伝説で有名な義賊ではなく、異教の森の妖精「ロビン」'Robin'、別名で「ロビン・グッドフェロウ」'Robin Goodfellow' <またの名 'Puck' >のことであると考えられている。[13] しかしこの件については、各地でその混同が実によく見られ、むしろ定着の観さえ窺われるほどである。）

この日には、自然の再生を祝って緑の葉飾りや花輪が運び込まれるが、これも豊穣の象徴である。かつては舞台で冬と夏の争いを象徴する戦いが演じられ、常に夏の勝利で終わり、夏が栄光の座を獲得した。（今はこの座は、その健全な美によって選ばれた若い女性、五月女王が占めている。）これらの念入りに計画されたお祭り騒ぎの目的は、来るべき季節の収穫が幸運に恵まれることや、家畜と飼い主の両方の幸福が守られることを保証するためであった。

この日は一年中で最も魔術的な日として見なされ、そのためこの日に関する迷信・俗信は数多く見られる。またその多くは予言と占いであり、特に未来の結婚相手についての情報を得ることに関連したものがよく見受けられる。

☆「未婚の男女は、五月祭の日の正午に井戸を覗き込むと、そこに未来の結婚相手の顔を見ることができる。もし何も見えなければその人は一生独身で過ごす。」

☆「もしも井戸の中に、棺に入った自分自身の姿を見れば、その人は 1 か月以内に死亡する運命にある。」

☆「女性が未来の恋人の姿、幻を呼び出したい場合は、古い地下室とか納屋に毛糸の玉

を投げ込み、以下のように唱えながら毛糸を巻き戻せばよい。」

I wind, I wind, my true love to find, The colour of his hair, the clothes he'll wear, The day he is married to me.[14]	(巻いて巻いて、ほんとの恋人のことを知るために、その人の髪の色、その人の着ている服、彼と私が結ばれる日を。)

すると、糸の玉を全部巻き終わらないうちに、恋人が姿を現し彼女を手伝うであろうと言われる。

☆「この日の朝、目が醒めたらすぐに恋人の写真を鏡に映せば、年内に結婚できる。」(これは広くヨーロッパで言われている。)[15]

☆「五月祭の前夜、サンザシの花のついた枝を十字路へ持っていき、どこかにかける。翌朝にその枝が向いている方角から未来の夫が現れる。枝が吹き飛ばされていたら、一生結婚できない。」これは、イギリスのハンティンドンシャーの伝承とされる。

また、かつてケルト人にとっては、五月祭は大切な牛や羊などの家畜を夏期放牧するための祭日とされ、以後10月31日のハロイーンHalloweenまでの期間に、家畜の息災を神々に祈願する祭儀が行われた。その主要な行事は、各地の山頂で大かがり火を盛んに燃やし続けることであったが、このかがり火の祭儀は、スコットランドの高地地方では1830年頃まで残っており、特にウェイルズでは20世紀に入っても続けられていた地方があったようである。[17]

このかがり火の燃えさしは火種として持ち帰られ、その灰は「幸運のお守り」として大切に保存された。しかしながら、Charles Kightlyも指摘するように、ここ数百年間は、かがり火は神への祈願というよりは、むしろその前日の4月30日の晩に徘徊すると信じられた魔女を焼き払うために燃やされてきたようである。[18]

既述のように、人々にとって家畜は大切なものであるが、その家畜やそれから作られる酪農品に関する次のような俗信が見られる。

☆「火をつけた藁で家畜の毛を焼くことにより、来るべき1年間家畜を災いから守ることができる。」[19]

☆「この日には、雌牛に血を流させると、1年間災いから彼らを守ることができる。」

☆「この日、ナナカマドrowanが牛小屋の戸口に置かれなければ、牛が魔法にかけられる。」スコットランドの信である。[20]

☆「この日、牛たちの中に見つけられる野ウサギは魔女の使いなので、全て退治しなければ牛乳が台無しになる。」これは、特にスコットランドで言われる。

☆「もし五月祭に雨が降ると、その年に搾る牛乳の量が半減することを農夫は覚悟しなければならない。」

☆「この日、薬草の茎や葉を雌牛の尾から抜いた数本の毛とともに煮ると、次の年の間

中、魔女にいたずらをされてバターの味がおかしくなることがない。」

☆「この日サンザシの花枝を家に持ち込む女性のお手伝いさんは、おいしいクリームをいただく資格がある。」コーンウオル地方で言われる。[21]

さらに次のようなことも言われる。

☆「五月祭の日には、特に火、また塩、水などを売ったり与えたりしてはいけない。それをすれば家に災難を持ち込むことになる。」殊にアイルランドにはこの古い伝承がある。(実は、イギリス全土で、クリスマスと新年にも全く同じことが言われる。)[22]

(2) 五月祭の歴史と変遷

五月祭は夏の到来を祝う盛大な祭りで、長い歴史を有し、特異な変遷を辿ってきた。本来この祭りはケルト人によって始められ、全く異教徒の祭儀であった。キリスト教布教時代に入り、教会が異教徒との対決を避け、徐々にキリスト教の制度や儀式を導入する柔軟な姿勢に方針転換したことにより、中世を通じて広く各地で盛んに行われていた。

宗教改革期には、プロテスタントによってその行事は偶像崇拝以外の何者でもないと厳しく攻撃され、為政者により禁止令が出され、それに対して反対騒動も起きたりもしたが、厳格に実施された。五月柱は言うまでもなく、早朝に草花摘みに出かけることから派生するふしだらな風習までをも攻撃し、結局1644年には議会で「迷信と不品行を助長する異教徒の悪習」として、全面的に禁止され、引き続く共和政権の期間もこれが維持された。

なお、エリザベス朝時代には、プロテスタントのうち特にピューリタン(清教徒)たちが、森から持ち帰ってくる五月柱とその周りでの賑やかな振舞いを厳しく非難した。またピューリタンについては、新大陸アメリカでも五月祭を極めて批判的に見たり、また破壊行動に出た事実も見られる。

しかし、1660年に大陸に亡命していたチャールズ2世 Charles Ⅱを迎えて王政復古体制が成立すると、国王への忠誠を示す行事としてこの五月祭が各地に復活し、再び盛んに祝われた。その後18世紀から19世紀初頭にかけて五月祭は再度衰退傾向が続く。しかしヴィクトリア朝時代になると、失われていた「楽しい英国」'Merry England'を熱望する風潮が高まり、五月祭は時流に乗った形相を帯びて再び活気を取り戻すようになった。

19世紀半ばには五月祭の行事が各地に復活し、盛大に祝われるようになった。内容もかつてのものとは違い、聖職者や小学校教師などによって上品なものに改められていた。子供たちが花環を持ち歩き、祝儀を求めるその仕方も品のよいものへと意図されていた。今日「伝統的な五月祭」と呼ばれるものは、このヴィクトリア朝時代の熱狂的な時流に乗って復活したものか、あるいは誕生したものであるとされる。[23]

現在、五月祭の開催地は数千箇所に上ると言われる。普通5月1日の後の土曜日か、他の適当な週末に行われる。五月祭のうちで恐らく最も豪華と言われるものに、チェシャー州のナッツフォド Knutsford の「ロイアル五月祭」'Royal May Day'がある。これは

1864年にBamacle師によって始められたが、この祭りは1887年に王族を迎えて以来、その名に「ロイアル」の語が付加されている。そこでは他と同様に五月女王の行列が行われるが、その行列は「青葉の中のジャック」に先導され延々と続く。4チームのモリスダンサーたちのほか6チームの楽隊が加わり、ボーイスカウト・バンドも含まれる。行列は五月女王と侍女たちの乗る馬車の登場で最高潮に達する。ロビン・フッドとMerry Menに付き添われ、幼い衛兵たちBeefeatersに護衛される華やかでかつ賑やかなものとして知られる。

この祭りでは当地独特な「結婚するカップルを祝福して、街路に砂を撒く」風習が見られる。これは11世紀のクヌート王King Canute（Cnut）が、あるとき川を渡り終えたときに、目の前をたまたま通りかかった新婚者を祝福して、靴に入っていた砂を撒いたことに由来すると言われる（その川はクヌート川Knut's Ford、さらにそれが町名のKnutsfordにもなったとされる）が、特に花嫁のために鮮やかな色の砂を撒く風習がある。

また現在ではこれが波及して、五月祭の早朝にはこの砂模様が公共の建物や、五月女王とその侍女たちの家の前に描かれ、次のような祝辞の文句が添えられる。

Long may they live － happy may they be
Blessed with contentment and from misfortune free.[24]
（願わくば末長く－幸せな日々に恵まれ、
常に安らかにつつが無きことを。）

これは極めて珍しいものであり、この地方にのみ見られる風習である。

こうして五月祭はヴイクトリア朝時代に大きな変遷を遂げたが、なおそれ以前の古い風習を現在も守り続けている地方もある。例えば、ファリー祭のダンス行列Furry Dance, アボッツベリーの花環祭りAbbotsbury Garland Day、マインヘッドの棒馬祭りMineheead Hobby Horseなどが挙げられるであろう。[25]

(3) 五月の朝露 May dew と五月の花 May flower

5月1日の早朝には、少女や若い女性たちは日の出前に野や森に出かけていき、草の露を集め、それで顔を洗う風習がある。

☆「この日の朝、集めた露で顔を洗うと、そばかすがなくなるだけでなく、さらに顔を洗いながら一心に念じれば、向こう1年以内に夫となる男性に巡り会える」と言われる。ただし、この朝露での洗顔は、毎年続けなければいけないとされる。

朝露の中でも特によいとされるのは、サンザシhawthornやキズタivyの葉の露、またオークoakの木の下に生えている草や苔から集めた露がよいとも言われるようである。また一部の地方では、新しく建てられたばかりの墓石から採った露が、視力減退や通風など

の万病の霊薬として珍重されると言われる。

この五月の朝露の美容効果に関して、Peppys, *Diary*（1667年、5月28日の日記）に次の記述が見られる。

> ...After dinner, my wife away down with Jane and W. Hewer to Woolwich in order to a little ayre, and to lie there tonight and so to gather May dew tomorrow morning, which Mrs. Turner hath taught her as the only thing in the world to wash her face with, and I am contented with it. ...[26]
>
> (...夕食後、妻はジェインと W. ヒュアーと連れだって、ウルウィックへと気晴らしに出かけた。そこで一泊して、翌朝に五月の朝露を集めるのだが、ターナー夫人が妻に教えたところでは、それこそ世界でただ一つの洗顔剤だということである。私は結構なことだと思っている。)

なお、五月の朝露については、一般的には五月祭（5月1日）の朝に採ったものがよいという考え方があるが、その日のみとは限らず、各地にいろいろな習慣があり、5月3日（十字架の日とされる）が最もよいとする地域（アンガス Angus など）もあり、また5月であればいつの朝露でも体によろしい、とする考え方もあるようである。一般にこの朝露は、ただれ目などの眼病に効くと言われ、また背骨の弱い子供であればその露の上に寝かせるとよいとか、布を広げて朝露を受けそれで子供を包むとよい、とも言われる。さらに露と繋がる雨についても、同様のことが言われる。[27]

こうした信仰は現在でもスコットランドの各地で見られ、例えば首都エディンバラでは、市の東南部にあるアーサーズ・シート Arthur's Seat の名で知られる小高い丘が、かつてのかがり火の場所と信じられ、5月1日の早朝には大勢の娘たちが登ってきて、日の出を迎え、特にサンザシの木から落ちる朝露で顔を洗う。

また、5月1日は「願い事の泉」'wishing well'を訪れる日でもある。エディンバラでは、例えば、アーサーズ・シートの麓には聖マーガレットの泉があるが、この日早朝に泉の周りにひざまづき、その水を飲みながら願い事を呟けば願いが叶えられる、と言われる。[28]

一方、イングランドやスコットランドの低地地方では、五月祭の主たる行事と言えば、「五月の花を摘んで持ち帰ること」であり、そのため早朝まだ暗いうちから野や森に出かけて行き、花の咲いている小枝を持ち帰る。暦法改正（1752年）により、実際の日取りが11～12日繰り上げられたため、この時期に咲く花が極めて少ない実情があるようである。イングランドの大部分の地方では、サンザシが好まれ、コーンウォル州の一部ではサイカモアカエデ sycamore が好まれる。スコットランドとウェイルズとイングランド北部と西部の一部の地方では、五月の花 May flower とはナナカマド rowan とカンバ birch であるとされ、いずれも魔よけになると信じられている。

花を持ち帰ると、その花や枝で戸口や家の中を飾ったり、また、好意を寄せている家の戸口の上り段にそっと置いておき、後から祝儀をもらいに訪れる風習もあったと言われる。[29)]

花を摘みに出かけた人々は木の枝と一緒に、とりわけ五月の花とも言われるリュウキンカ marsh marigold やその他のさまざまな花を摘んで帰り、それを丁寧に編んで花輪を作る。この花輪作りは、今も小学生たちの間での人気行事である。特にイングランドの中部地方の南部では、現在でも子供たちが一団になって花輪を担ぎ、町や村の中を歩いて回り祝儀を求める姿が見かけられる。

(4) メーデー（労働者祭）としての May Day

また一方、五月祭は「メーデー」（いわゆる「労働者祭」）としての祭典の日にもなっている。Tad Tulejaの記述によると、1889年、フランスに本拠地を置く第二インターナショナル the Second International が五月祭に労働者の日 Labor Day という新しい名をつけて以来、5月1日はヨーロッパ（そして一部アメリカ）の社会主義者の純粋な現世の休日となった。ヨーロッパのメーデーは、資本主義に反対するパレードや集会が行われ、広く労働者階級の団結を祝う式典である。アメリカに同じような祝典がないのは皮肉である。[30)] 今日のアメリカの Labor Day はヨーロッパのそれとは全く異なり、その日も5月1日ではなく9月の第一月曜日が当てられている。［実は、執筆者はたまたま2006年9月4日（月）、このメーデーにオハイオ州に滞在していたが、この日は、まるで日本の「お盆」を思わせるような日で、人々は仕事から離れ、遠くに暮らす者も親元に帰り、家族が久しぶりに集まり、ご馳走を食べ、互いの無事を喜び合う家族団欒の休日光景が見られた次第である。］

［次号「聖霊降臨の祝日・夏至祭」等に続く。］

Acknowledgements:

貴重なご教示をいただいた Amy Chavez 氏（元、中国短大講師）に、感謝申し上げる。

Notes:

1） "April Fools' Day," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London : Cassell, 1995).

2） "April Fools' Day,"『英米故事伝説辞典』井上義正編（東京：冨山房, 1972）37.

3） "April fool," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp. (1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer; London : Cassell, 1978).

4） "April fool," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York : Philosophical Lib., 1949 ; New York: Greenwood, 1969).

5） "April 1," *The Perpetual Almonac of Folklore*, ed. Charles Kightly (London : Thames and Hudson, 1987).

6) "April Fools' Day," Pikering.
7) Margaret Joy, *Highways and Holidays* [ano. H. Funado] (Tokyo : Kinseido, 1983) 37.
8) "St. George's Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London : Thames and Hudson, 1986) 203.
9) "May-day," Brewer, 696.
10) "Mayday," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989 ; Oxford: Oxford UP., 1990).
11) "May-day," Brewer, 696.
12) Joy, 42.
13) "May Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 160 (L).
14) "Mayday," Pickering.
15) 荒俣宏『ジンクス事典(恋愛・結婚篇)』(長崎出版, 2005) 54.
16) 荒俣, 42.
17) "May Day," Pickering.
18) "May Day," Pickering.
19) "May Day," Pickering.
20) "April fool," Radford.
21) "April fool," Radford.
22) "May Day," Pickering.
23) "May Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 161 (R).
24) "May Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 162 (L).
25) "May Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 162 (L).
26) Samuel Pepys, *The Diary of Samuel Pepys*, May 28th, 1667, ed. R. C. Latham & W. Matthews, vol.Ⅷ, (1971, Bell & Hyman Ltd.; London : Harper Collins Pub., 1995).
27) "May dew / Rain cures," Opie & Tatem.
28) 東浦義雄・船戸英夫・成田成寿『英語世界の俗信・迷信』(東京:大修館書店, 1974) 8-9.
29) "May Day," *The Customs and Ceremonies of Britain*, Kightly, 159 (R).
30) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York : Harmony Books, 1987) 167.

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural Background of the English & The Americans—(15) Ⅳ The Year's Celebrations Part 4: On the Customs and Superstitions of April Fools' Day, St. George's Day & Shakespeare's Birthday, and May Day

Kunihiro FUJITAKA
Faculty of the College of Life Science,
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 4, 2006)

We know that people are apt to become stereotyped when they lead a customary life every day. In order to keep their bodies and souls more active, they need some pleasant events, or festivals, in their life which will give themselves moderate tension, much vigor, and above all, lots of fun.

In the present writing, we would like to speculate on the customs and various superstitions of some festivals —April Fools' Day, St. George's Day & Shakespeare's Birthday, and May Day. In this speculation, we would like to pay special attention to examining historical and cultural aspects of those festivals.